

令和 3 年 5 月 12 日現在

機関番号：16401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23043

研究課題名（和文）文体差に着目した日本語の文法変化の研究

研究課題名（英文）A Study of Grammatical Change in Japanese from the Perspective of Stylistic Differences

研究代表者

北崎 勇帆（Kitazaki, Yuho）

高知大学・教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門・講師

研究者番号：00847949

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、和文・漢文訓読文、話し言葉・書き言葉といった「文体」の差異が、日本語の文法要素の変化に与える影響の差について明らかにすることを目指すものである。この観点に基づき、本研究では、中世末期の文法書『日本大文典』における当代話者の「話し言葉」と「書き言葉」に対する文体意識の解明や、近代の口語意識を窺うことのできる新出資料『新訳狂言記』、『春色梅児誉美』の3種の新訳作品の紹介を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、話し言葉を反映する資料を中心として進められてきた日本語文法史研究において、文体差という複層的観点を導入したことの意義は大きい。また併せて、江戸時代の原拠本と明治時代の訳本との対照、すなわち時代間の対照という日本語史の定石的手法に用いやすい新資料の活用も期待される。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the difference in grammatical changes in Japanese due to difference in stylistic. Based on this perspective, this study examines the awareness of spoken and written Japanese in the Muromachi period, and introduced new materials from the Meiji period.

研究分野：日本語学

キーワード：日本語史 文法史 文体史

1. 研究開始当初の背景

本研究は、日本語の文法の歴史的な変化について、「文体の差によって、文法変化の起こり方に差異が存する」という予測に基づき、その実態の解明を目的とするものである。これまでの日本語史研究において、文法史の分野には文体間の差異という観点が看過され、文体史においては文体差を持つ文法項目を対象とする研究が不足していた。

申請者は本研究以前に、現代語における「何であれ」のような、動詞命令形に由来する条件表現が、平安時代の和文資料と漢文訓読資料において異なる振る舞いをするということを明らかにしている。本研究はこの点に着想を得た上で、上記の状況を踏まえて実施するものである。

2. 研究の目的

上記の背景に基づき、本研究では、「文体差が文法変化に与える影響の差異」の解明を中心の目的とする。

3. 研究の方法

ある文法形式や範疇における文体間の用法対立を明らかにするため、和文・漢文訓読文間や、話し言葉・書き言葉間の同一形式・同一範疇における用法記述とその比較を行う。具体的には、中古の和文資料と訓点資料(漢文訓読資料)、中世の和漢混淆文と訓点資料、室町時代の話し言葉と書き言葉といった、文体対立のある資料を調査・検討の対象とする。併せて、当代における文語・口語の意識を窺い知ることのできる資料の発見・紹介も行う。

4. 研究成果

上記の目的・方法に基づいて、以下の研究成果の公表を行った。なお、中古・中世にかけての漢文訓読資料を用いた研究については、研究期間中の成果公表には至らなかった。

- (1) ロドリゲス『日本大文典』の活用の項の記述において、「話しことば」と「書きことば」とがうまく対応しない場合のあること、また、それが実際の「書きことば」の資料とも整合性のない場合もあることを示した上で、その記述にロドリゲス自身の文体意識が反映されている可能性のあることを指摘した。
例えば、ロドリゲスは『日本大文典』の「ナラバ」の説明においては、「話しことば」にはウとナラバとの接続を認めるが、「書きことば」ではン(後世のウに対応)とナラバや、類似するベキとナラバとの接続は記述しない。しかしながら、ロドリゲスが「書きことば」の対象とする資料にはベキナラバの例が一般的に見いだされ、『日本大文典』の別の箇所には、ベキナラバを含む例が引用されることもある。これは、ロドリゲスがその接続が可能であることを認識しながらも、意図的に体系記述から省いたことを示すものと考えられる。
(『日本大文典』の意志・推量形式と「話しことば」「書きことば」)
- (2) 近世に板行された版本の「狂言記」を近代に口語訳した『新訳狂言記』の資料紹介と、それらの比較対照により言語変化の手がかりや、近代の話者の、語・形式に対する新旧の意識を探ることができることを示した。
『新訳狂言記』は大正8年(1919)、佐久間春山なる人物による、版本狂言記の当代語訳本である。その収録曲目より、底本は古谷知新編『狂言全集』(国民文庫、1910)と目される。例えば冒頭数頁の間であっても、未来を表す「此の間」を「近々」、「定めて」を「屹度(きつと)」、「現代と格の異なる「腹を立つ」を「立腹する」、「ござらぬほどに」を「ないから」、「軽うござつたによつて」を「軽いので」、「引き上げて見ましてござれば」を「引き上げて見ましたら」とするなど、様々な語彙項目・文法項目にわたる改変の例を提供する。
(近代に口語訳された狂言記)
- (3) 江戸時代刊行の『春色梅児誉美』を近代に口語訳した「新訳」作品3種の資料紹介を行い、「新訳」と冠された資料においても、その訳の熟れ具合には刊行時期とは一致しない形での差異が存すること、(2)同様の資料としての活用が可能であることを示した。
具体的には、A 熊谷為蝶訳『新訳梅ごよみ』(1913、東雲堂書店)、B 太田柏露訳『梅ごよみ』(1918、豊文館)、C 中内蝶二訳『新訳梅ごよみ』(1920、名作人情文庫刊行会)の書誌を紹介し、最も古いAが原作を最も改変し、新しいCが原作に忠実であることを示した。
(近代に口語訳された三種の梅暦)
- (4) 助動詞ムは「思はむ子を法師になしたらむこそ心苦しけれ」(枕草子)のような連体修飾用法を持つが、現代語のウ・ダロウは、「思おう子」「思うだろウ子」のような連体修飾を一般的には行わない。助動詞ム・ウの用法は、時代を通じて主節末の用法に一本化するとい

予想があるが、従属節末においては中世後期にむしろ用例が増大し、質的にも拡張することを示した。

(意志・推量形式の終止・非終止用法の推移)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 北崎勇帆	4. 巻 51
2. 論文標題 『日本大文典』の意志・推量形式と「話しことば」「書きことば」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高知大國文	6. 最初と最後の頁 79(1)-63(17)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 北崎勇帆	4. 巻 22
2. 論文標題 近代に口語訳された三種の梅暦	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代語研究	6. 最初と最後の頁 335-356
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北崎勇帆	4. 巻 50
2. 論文標題 意志・推量形式の終止・非終止用法の推移	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 高知大國文	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 北崎勇帆	4. 巻 39
2. 論文標題 近代に口語訳された狂言記	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語語彙史の研究	6. 最初と最後の頁 117-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 北崎勇帆
2. 発表標題 『日本大文典』に見る中世末期の意志推量形式
3. 学会等名 高知大学国語国文学会第68回研究発表会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------